

# 横井小楠 —その業績と生涯—

小楠が招かれて越前福井に来た初めのころ、藩主松平慶永は、將軍家定の跡継ぎ問題※などで幕府と対立し、のちには藩主を辞めさせられ、江戸から離れることができませんでした。このころから慶永は春嶽を名乗ります。その後、大老井伊直弼※が暗殺されて春嶽の謹慎※が解け、春嶽は小楠と会うことができるようになりました。



▲松平春嶽肖像写真  
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

## 13 松平春嶽と初の対面

小楠を福井に招いた直後から、小楠とぜひ面会したいと願っていた春嶽は、万延元年(1860)2月から福井に3回目の交流で来ていた小楠に対し、江戸に出て来るように頼みました。そこで小楠は、肥後藩から許しを得て、翌年の文久元年(1861)3月下旬、福井を出発し、4月に江戸に着きました。

小楠との対面がようやく実現した春嶽の喜びは大変なものでした。小楠は手紙(同年4月19日付)で、「春嶽様は毎日お出でになって御話し合いなされ、学問の大事な点などよくご理解される。御父子(春嶽と茂昭)様や家老の方々との会合も既に4回おこないました。毎回正午より夕方まで話し合いましたが、殿様と家臣との間柄は家族の集まりのようです。私への対応も手厚く、御父子は次の間まで送り迎えなされ、足痛のこともご存知のようで敷物までご用意なされる程です。」と言い、越前藩重臣の中根雪江も「総て師實の礼を以てご接待なされた。学問講義の日には自分も出席したが、御役人共も用事のない者は同席して拝聴するように命じられた。」と語っています。また、江戸滞在中に、小楠は幕臣の勝海舟や大久保忠寛※とも親しく行き来しています。

小楠は、福井や江戸で1年以上滞在したため、故郷を思う気持ちが高まってきました。そこで、春嶽父子に帰国の許可を得て、ひとまず福井に立ち寄ったのち、文久元年(1861)10月、7人の福井の書生を

連れて沼山津に帰りました。1年8か月ぶりに帰国した小楠は、母や兄が眠る往生院(熊本市池田)で墓参りを済ませ、小楠の帰りを待ち焦がれていた門生や、福井の書生たちへの講義で多忙な日々を送ります。

ところが、講義が休みの11月26日、小楠は近くに狩猟に出かけ、「榜示犯禁事件」を起こします。沼山津一帯の沼沢地は藩主専用の鷹狩りをする場所で、標識(榜示木)が立つ禁猟区になっていました。しかし、小楠はその場所で残った弾を射ち放したため、監視の役人に見咎められ、謹慎しなければなりません。

文久2年(1862)、小楠は、越前藩による4回目の招聘を受けて、同年6月、熊本を発ちました。途中、春嶽からの急使により直接江戸へ直行し、7月6日、江戸霊岸島※にある越前家別邸に着きました。

※跡継ぎ問題…徳川家定(第13代將軍)の跡継ぎについて、大老(幕府の最高職)井伊直弼を中心とする幕府と、御三家の徳川齊昭(水戸藩主)・松平春嶽・島津齊彬(薩摩藩主)らが対立。その結果、井伊大老の推した紀州家の徳川慶福(のちの第14代將軍家茂)を内定した。

※井伊直弼(1815~60)…

幕末の彦根藩主(30万石)。幕府の大老となり、天皇の許し(勅許)なしに外国条約を調印し、將軍跡継ぎ問題などで反対する大名・公家・武士たちを弾圧(安政の大獄)。のちに水戸浪士らにより桜田門外で暗殺された。

※謹慎…刑罰の一つで、ある場所に居させて外出を許さないこと。

※大久保忠寛(1817~88)…号は一翁。江戸末期の幕臣(將軍直屬の家臣)。外国奉行などを歴任し、江戸開城に尽力する。

※霊岸島…隅田川河口先の島だったが、埋立てなどにより現在は陸続き。東京都中央区の一部。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。